

田原本町埋蔵文化財調査年報 3

平成 3 年度



唐古・鍵遺跡第47次調査



唐古・鍵遺跡第45次調査



十六面・藥王寺遺跡第 7 次調査

1992

田原本町教育委員会

唐古・鍵遺跡第47次調査

例　　言

1. 本年報は、田原本町教育委員会が平成3年度に実施した発掘調査及び試掘調査・立会調査の概要である。発掘調査については、重要な成果が得られたものについて別途、その概要を作成中である。
2. 発掘調査は、本文第1表にまとめたように受託事業については原作者に、国庫補助事業については土地所有者に多大な理解と協力を賜わった。
3. 本文中に記載された遺構の記号については、「SD」が溝を、「SK」が土坑を表わす。
4. 本年報の執筆は、各調査担当者があたり、編集は藤田がおこなった。

目　　次

1. はじめに.....	1
2. 調査した遺跡の概要.....	3
(1) 唐古・鍵遺跡第45次調査.....	3
(2) 唐古・鍵遺跡第46次調査.....	4
(3) 唐古・鍵遺跡第47次調査.....	5
(4) 唐古・鍵遺跡第48次調査.....	8
(5) 唐古・鍵遺跡第49次調査.....	11
(6) 十六面・薬王寺遺跡第7次調査.....	13
(7) 十六面・薬王寺遺跡第8次調査.....	15
(8) 羽子田遺跡第4次調査.....	16
3. 試掘調査・立会調査の概要.....	17

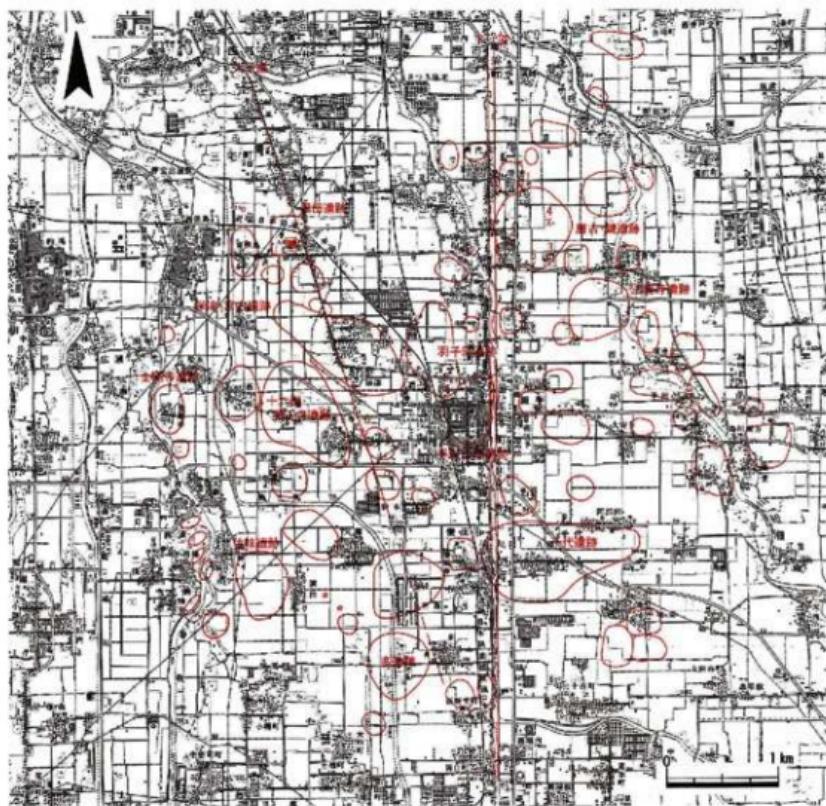
1. はじめに

田原本町における平成3年度の発掘届・通知件数は25件である。これは平成元年度までの増加から一転し、バブル経済崩壊とともに平成2年度32件と減少傾向がみられた。平成3年度の25件の内訳は文化財保護法第57条の2が18件、同第57条の3が7件である。内容的には宅地開発にかかるものが少くなり、農家住宅新築など個人・公共的なものとなる。発掘の通知は9件で、田原本町教育委員会でおこなった発掘調査は前年度からの発掘通知を含め8件である。これらの調査では、いくつかの新知見も得られており、時代ごとにまとめてみることとする。

弥生時代の調査としては、唐古・鍵遺跡の第45次から第49次の一連の調査がある。第45次調査はムラの北端の調査で、これまでの調査で検出していた弥生時代前期の河跡（中央砂層あるいは南方砂層）の延長を確認することになった。これは、ムラが形成されるうえでの地形復元の参考となった。第46次調査はムラの西部、第48次調査はムラの東部、第49次調査はムラの南部の各居住区の調査であった。いずれも多数の遺構・遺物を検出し、唐古・鍵ムラの内容性の豊富さを示した。特に48次調査では、弥生時代後期のタタキ板が出土し、土器製作技術の一材料を提供した。第47次調査は、ムラの南東部の調査で弥生時代中期から後期の

第1表 平成3年度発掘調査一覧表

遺跡名	調査水数	調査地	原団書	原因	調査期間	調査面積	時代	調査担当	備考
1 唐古・鍵	第45次	田原本町唐古 334、335-1	森岡伸蔵 森岡実希子	店舗建築	1991. 6. 5 ～ 6. 11	約40m ²	弥生・中世	藤田三郎	受託事業
2 唐古・鍵	第46次	田原本町鍵 315-1	森田信弘	農家住宅新築	1991. 9. 12 ～ 9. 21	約10m ²	弥生・中世	北野隆亮	国庫補助事業
3 唐古・鍵	第47次	田原本町鍵 155	田原本町	プール改築	1991. 10. 2 ～ 12. 1	約625m ²	弥生・古墳	藤田	
4 唐古・鍵	第48次	田原本町唐古 138-141-142 ・隣接地	唐古大字	用水路	1991. 11. 18 ～ 1992. 1. 16	約130m ²	弥生・古墳 中世・近世	北野 豆谷和之	
5 唐古・鍵	第49次	田原本町鍵 263-3	森川新司	農業用倉庫建設	1991. 12. 2 ～ 1992. 1. 21	約91m ²	弥生	藤田	国庫補助事業
6 十六面・東王寺	第7次	田原本町東王寺 62, 63-1地	株式会社 富士工務店	宅地開発	1991. 5. 20 ～ 6. 13	240m ²	弥生・古墳 奈良・中世	北野	受託事業
7 十六面・東王寺	第8次	田原本町十六面 48-1-49-1 の一部	小瀬石油 株式会社	ガソリンスタンド建設	1991. 10. 24 ～ 11. 12	84m ²	古墳・奈良 中世	北野	受託事業
8 羽子田	第4次	田原本町 364-1	山道広域行 政事務組合	防火水槽設置	1991. 7. 22 ～ 7. 29	45.5m ²	古墳	藤田	受託事業



第1図 田原本町の遺跡と発掘調査地点

環濠を4条検出した。また、橋脚も出土し、ムラの南東側の出入口が初めておさえることができた。青銅器の鋳造関連遺物も少量出土したが、量的には西隣接地の第3次調査の方が多い、この周辺に工房跡があったと考えられる。

古墳時代の調査では、羽子田遺跡第4次調査がある。この調査では古墳時代前期の方形周溝墓と考えられる遺構を確認し、古墳時代前期・後期の古墳と方形周溝墓が共存する形の古墳群であることがわかった。

古代から中世の調査としては、唐古・鍵遺跡第45次調査で中世寺院関係の大溝、第46次調査では唐古氏関係の大溝を検出した。十六面・薬王寺遺跡第7・8次調査では古代から中世の水田跡を確認し、いずれも条里方向に合わないもので、条里制を考える上で重要であった。

2. 調査した遺跡の概要

(1). 唐古・鍵遺跡第45次調査

位置と環境 遺跡は標高47~49mの沖積地に立地する。調査地は遺跡の北端部にあたり、本地の西側を第36次、南100m地点で第21次、同じく南へ150m地点で第2・17次調査をおこなっている。本地は周辺の状況から環濠帯の外縁部にあたり、また、中世寺院の範囲となる。

遺構・遺物の概要 遺構と遺物には、弥生時代前期と中世の2時期がある。弥生時代前期は河跡が検出された。河跡は調査区の全域に及んでおり、幅20m以上、深さ2m以上ある。河跡は、下部が砂層堆積で、上部は黒色粘土層等で埋没している。この上部では、完形の壺形土器が穿孔された状態で出土した。この他に、杓子未成品1点、投弾1点などの遺物がある。これらの遺物はほとんど磨耗していないことからこの近辺で廃棄されたものであろう。

中世の遺構は大溝と小溝が各1条検出されている。大溝は東西方向に走向するもので、南肩のみ検出した。幅1.9m、深さ0.7m以上を測る。羽釜など出土しているが、遺物は少ない。第36次調査で検出した大溝に、鉤の手状になりながら接続すると考えられる。

まとめ 今回の調査は小規模であったが、弥生時代前期の河跡と中世大溝を検出するという成果があった。河跡は弥生時代前期の最も古い段階で、第17次調査で検出した河跡の延長である。中世大溝はその位置から、北西側に中世遺構がひろがるようである。



▲杓子未成品出土状況（弥生時代前期）

◀ 河跡掘り下げの状況（弥生時代前期）（東から）

(2). 唐古・鍵遺跡第46次調査

位置と環境 遺跡は標高47~49mの沖積地に立地する。調査地は遺跡の西部に位置し、第14次調査地の西約30m、また第11次調査地の南約40mの地点にある。当地は第11・14次調査などの成果から弥生時代前~後期の遺構が密集する地域であることや中世の環濠集落内部にあたることが予測された。

遺構の概要 調査では弥生時代前~中期、室町時代中期、江戸時代前期の遺構面をそれぞれ確認した。小規模な調査の為、弥生時代前~中期の遺構は面的に確認することができなかつた。しかし、弥生時代前期の遺構内埋土となる暗灰色砂質土を確認している。室町時代中期の遺構面では南北に走向方向をもつ大溝の西側肩部を検出した。大溝は東西検出幅4.8m、検出面からの深さ1.8mを測る。断面土層観察から推定幅10m程度が考えられる。江戸時代前期の遺構面では井戸を1基検出した。直径約1.5m、深さ1.5m以上を測る。

遺物の概要 出土遺物はコンテナに約30箱あり、その大半が弥生時代前・中期の土器類であった。弥生時代前期の遺構内埋土と考えられる層からは壺や甕などの土器、獸骨、および武器形木製品が出土した。遺物包含層からは円筒埴輪や須恵器などが出土し、その層を基盤とする室町時代の大溝からは完形の土釜・土師器小皿がそれぞれ1点ずつ出土している。江戸時代の井戸からは信楽焼擂鉢、肥前系白磁皿、瓦などが出土した。

まとめ 今回の調査では弥生時代前~中期の遺構および遺物が予想通り密集した地点であることを確認した。遺物包含層から出土した円筒埴輪は周辺に古墳が存在したこと示している。室町時代の大溝を検出したことは当遺跡における中世環濠集落の構造を考えるうえでの貴重な材料を提供したといえ、調査面積約10m²と小規模ながらも意義深い調査となった。



調査地全景（室町時代）（東から）

(3). 唐古・鍵遺跡第47次調査

位置と環境 遺跡は標高47~49mの沖積地に立地する。調査地には遺跡の南東部にあたり、本地の西側を第3次、東側を第4次・第40次調査としておこなっている。調査では、第3次・第40次調査で検出した環濠の延長や青銅器铸造関連遺物の出土が予想された。

遺構の概要 東西15m、南北43mの調査区の全面で、弥生時代から古墳時代の諸遺構を検出した。本地は既設のプールがあったが、大半は遺構面の直上までの基礎であり、一部の破壊にとどまっていた。弥生時代前期の遺構は、弥生時代中期の大溝に切られた状態で木器貯蔵穴を1基検出しているのみで他は未調査である。弥生時代中期の主な遺構は4条の大溝と1条の自然河道である。大溝は北から S D-2105・S D-2104B・S D-2102B・S D-2103Bとなる。S D-2105とS D-2104Bはともに溝幅7.5~8.5m、深さ1.8~2mを測る大規模なもので、ムラの内濠にあたる。S D-2105の南側の溝斜面には長さ約2.3mもある杭が斜面にむかって斜めに打ち込まれており、橋脚と思われる。S D-2104Bは東半分のみの調査で、橋脚は不明である。遺物では權が出土している。これら2つの溝とS D-2102Bには厚い砂層堆積があり、弥生時代中期末に洪水で埋没していることがわかった。弥生時代後期においては、S D-2101・S D-2102・S D-2103の三つの大溝があり、各々はS D-2104B・S D-2102B・S D-2103Bの中期溝を再掘削したものである。S D-2101とS D-2102からは完形土器や木製品、青銅器铸造関連遺物が出土している。後期の3条の大溝は古墳時代前期まで溝さらえ等で存続している。



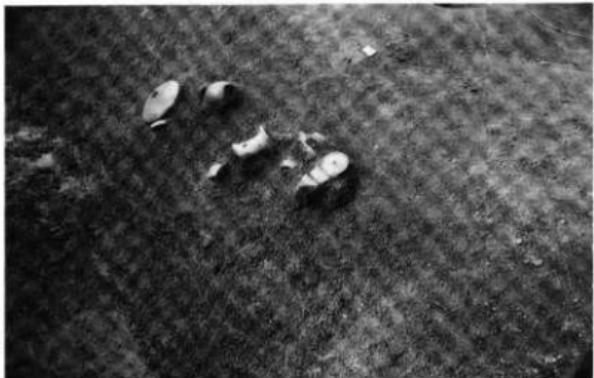
調査地全景（弥生時代中期）（南から）

遺物の概要 多量の弥生土器のほか、各種遺物が出土している。土器は弥生時代後期から古墳時代前期のものがSD-2101の大溝等から多量に出土している。また、小溝からは後期初頭の内窓のあいた台付壺が出土し、尾張地方の影響が考えられる。木製品では櫛や堅杵、ツチノコ、手網、蓋付容器、高杯など各種出土している。また、SD-2101からは納穴のある建築材も数点出土し、橋との関係も考えさせられる。石器は各種出土しているが、全体量は少ない。また、獸骨類も少ないが、注目すべきものとしてサメの歯がSD-2101から1点出土している。この他、重要遺物として送風管・銅鐸や不明青銅器の土製鋳型外枠の破片が数点出土している。また、線刻画土器としては高床建物や鹿がある。

まとめ 第47次調査は第3次と第40次の間にあり、これまでに検出した大溝の延長を確認することとなった。検出した大溝はいずれもムラの環濠と考えることができ、弥生時代中期以降、埋没と再掘削を重ねながら古墳時代前期まで存続することになる。各大溝はムラの内部に近くなる方が遺物の出土量が多くなるという傾向がみられ、SD-2105がムラの一番内側の大溝になろう。今回の調査で中期と後期の橋脚を出土したことは、環濠掘削以来、この地点がムラの出入口になっていたことが判明した。また、青銅器の鋳造に関しては、第3次と第40次で鋳造関連遺物が出土しており、第3次調査の出土量が多いことから、第3次調査の西北地点に工房跡が想定されよう。これは奈良盆地において西風や北風が多いことから、ムラの風下に工房を立地させたと考えられる。



SD-2104B大溝 完掘状況（弥生時代中期）（東から）



SD-2101大溝 土器出土状況▶
(弥生時代後期)



SD-2101大溝 遺物出土状況▶
(弥生時代後期)

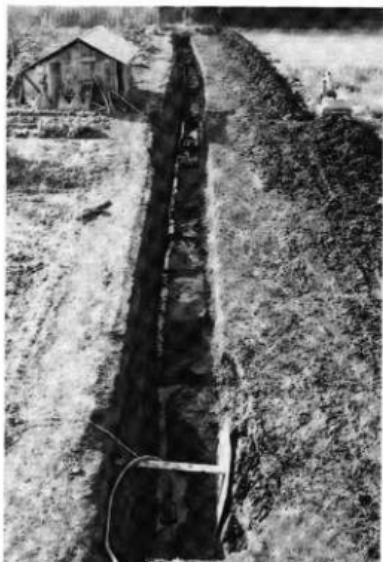


SD-2101大溝 横脚検出状況▶
(弥生時代後期)

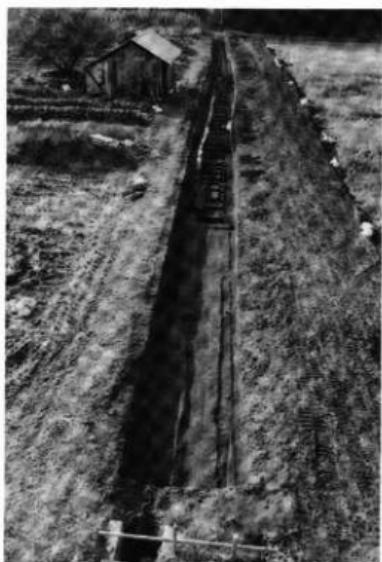
(4). 唐古・鍵遺跡第48次調査

位置と環境 遺跡は標高47~49mの沖積地に立地する。調査地は遺跡の東部にあたり、本地の北側で第24次、東側で第34次調査がおこなわれている。これらの調査により、付近が唐古・鍵弥生ムラの居住区から環濠帯にあたることが判明している。

遺構の概要 東西65m、南北2mの細長い調査区で、弥生時代から古墳時代前期の諸遺構を検出した。弥生時代前期の遺構に関しては、水路工事が前期遺構面まで及ばないため、土坑1基（SK-2301）を検出したのみにとどまった。弥生時代中期の大規模な環濠（SD-C201）を調査区東端において検出した。この溝の東肩は調査外に広がるが、第34次調査において確認しており、溝幅は約10m、深さ1.6m以上である。弥生時代中期において、SD-C201より西側は居住区であったらしく、多数の柱穴群や小溝、炉に関係すると思われる炭灰を検出している。弥生時代後期には、中期のSD-C201より3m程内側に、環濠（SD-C107）が掘削される。溝幅3.6m、深さ1.0mである。また、井戸（SK-1113）を1基検出している。この井戸の中位より、完形の長頸壺が1点出土している。古墳時代前期の遺構としては、土坑（SK-1101）1基と、井戸（SK-1104・SK-1111）2基を検出していいる。



弥生時代遺構全景（東から）



中世遺構全景（東から）



SD-C-107大溝 遺物出土状況▶
(弥生時代後期)



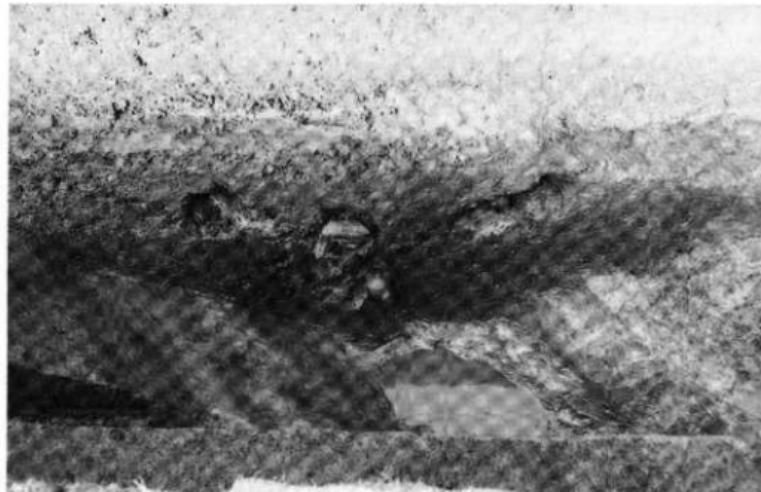
SK-1104井戸 遺物出土状況▶
(古墳時代前期)



SK-1101井戸 土器出土状況▶
(古墳時代前期)

遺物の概要 遺物は環濠や井戸などから、まとまって出土している。後期の環濠 S D—C 107からは、多量の完形土器が出土している。また、この溝からは、土器製作具のタタキ板、鉄斧用の柄などの木製品も出土している。今回の調査では、古墳時代前期の遺物もまた、多数出土している。S K—1101からは、上層で下半部を打ち欠いた直口壺、下層では胴部を打ち欠いた二重口縁壺が出土している。S K—1111からは、中層下位で壺が1点出土している。古墳時代前期の遺構で、最もまとまった遺物を出土したのが、S K—1104である。上層から、臼状の木製品1点、壺3点、中層から壺2点、甕2点が出土している。これら古墳時代前期の井戸や土塙からは、多数の小動物の骨が出土している。なお、古墳時代中期の遺構は検出できなかったが、須恵器や土師器の集中区があった。

まとめ 本調査区の東西65mという長さは、東の環濠帯から、西の居住区の一端を明らかにするものであった。弥生時代中期のS D—C 201、弥生時代後期のS D—C 107より内側に環濠はなく、弥生時代中期、後期における最も内側の環濠であることが予想される。調査区中央および、その周辺で検出された、柱穴群、小溝、炭灰は住居跡の存在が予想される。この他に從来古墳時代の遺構、遺物が希薄とされてきた唐古・鍵遺跡において、古墳時代前期の井戸、土坑などがまとまって検出されたことが成果として挙げられる。第5・24・27・34次調査などでも、古墳時代の遺構や河道が検出されており、遺跡東部が古墳時代の中心地であったと予想される。最後に、弥生時代前期の遺構は、大半が未検出であるが、遺構密度は高いと考えられる。

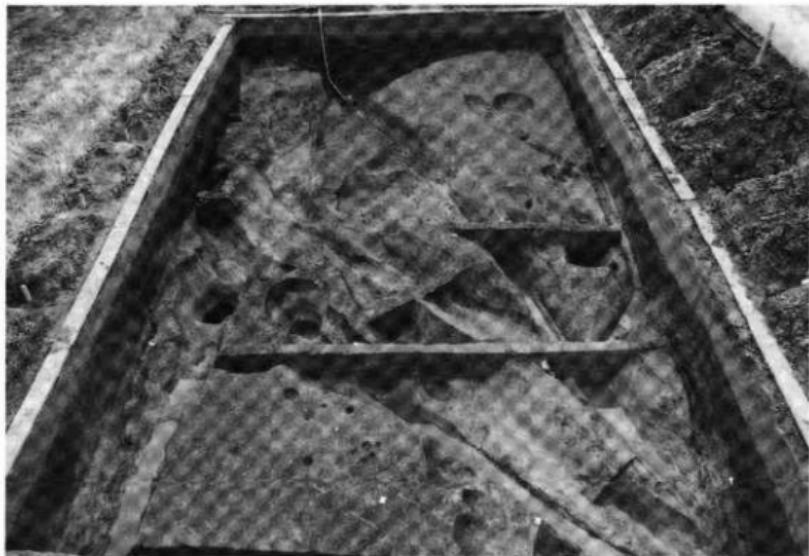


SD-C 107大溝 完掘状況（弥生時代後期）（南から）

(5). 唐古・鍵遺跡第49次調査

位置と環境 遺跡は標高47~49mの沖積地に立地する。調査地は遺跡の南部にあたり、細形銅矛片などが出土した第33次調査地の西側隣接地にあたる。調査では、弥生時代中期の環濠からムラ内部にあたる地区と予想された。

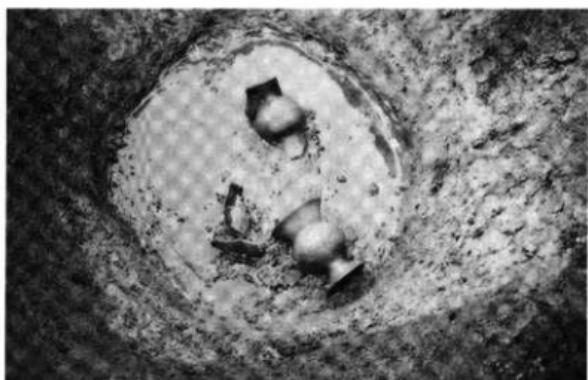
遺構の概要 検出された遺構は弥生時代中期から後期のもので調査区の全面で出土している。弥生時代前期の遺構は存在したと思われるが、中期以降の遺構掘削が著しく残っていない。中期の主な遺構は、土坑10数基と大溝1条、小溝8条、柱穴などがある。土坑の大半は直径1m前後のもので、出土遺物は少ないが炭灰を含んでいることが多い。井戸と考えられる土坑は4基あるが、小溝などに切られており、井戸の形態はほとんどわからない。大溝は調査区の南東部で検出したもので、第33次調査のSD-108の延長にあたる。大溝は推定幅4.6m、深さ1.4mを測る。大溝は再掘削され、再掘削時には溝の北肩斜面に丸太杭や板杭を打ち込んでいる。小溝は幅0.7m、深さ0.5m前後のもので北西から南東方向に走向するものである。弥生時代後期の主な遺構としては、井戸2基(SK-110・SK-111)と小溝2条(SD-101・SD-103)がある。SK-111は直径1.2~1.5m、深さ1.6mの大形で、埋没過程で3回にわたって完形土器が投棄されている。2つの小溝は南北方向に走向するもので、大量の土器が出土している。



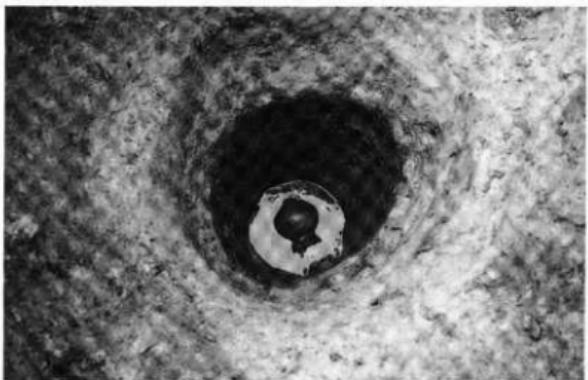
調査地全景（弥生時代中期）（北から）

遺物の概要 遺物はムラ内部にあたるところから、多量の土器が出土している。大半は土坑や溝から出土した土器で、弥生時代後期のものが占めている。木製品としては、中期の大溝から横鋤や補修孔のある大鉢などが出土している。この他、注目すべき遺物として銅鏡1点がある。

まとめ 今回の調査では、弥生時代中期から後期の遺構を検出し、環濠帯からムラ内部にあたることが判明した。数多くの井戸や小溝、柱穴は重複が激しく、長期にわたる居住空間であったことを示している。遺物としては銅鏡1点が出土した。東隣接地の第33次調査で3点、また、東100mの第3次調査で1点の銅鏡が出土し、この南地区で計5点を数えることになった。この南地区では銅鐸など青銅器を鋳造していることが判明しているが、銅鏡の出土量もこのようなことを反映していると考えられる。



◀SK-111井戸 中層土器出土状況
(弥生時代後期)



◀SK-111井戸 下層土器出土状況
(弥生時代後期)

(6). 十六面・薬王寺遺跡第7次調査

位置と環境 標高47m前後の沖積地に立地する。十六面・薬王寺遺跡はこれまでの6次にわたる調査で弥生時代の河道や古墳時代の水田遺構・方形周溝墓・井戸などの諸遺構、中世の集落跡などが検出されている。今回の調査地は遺跡の東縁部に位置し、太子道の推定線上にもあたる。

遺構の概要 調査地全域が弥生～古墳時代の河道内にあたり、その上に奈良時代頃と平安～鎌倉時代の遺構面をそれぞれ確認した。奈良時代頃の遺構面では調査区中央を東南から西北方向に走向する幅1～1.5m、深さ約0.6mの溝を検出した。その溝の南西側は水口や堰（表紙写真）が付属し、ウシやヒトなどの足跡や稻株痕を残す水田面が広がることを確認した。溝の北東側は明確な遺構はないが整地土と考えられる堆積が認められた。平安～鎌倉時代の遺構面はウシやヒトなどの足跡の残る水田面（奈良時代頃のものと同じ範囲）であり、平安時代後期の溝（奈良時代頃の溝の再掘削）・井戸・小溝、また平安時代末期～鎌倉時代前期の小溝等を検出した。

遺物の概要 遺物は弥生時代中～後期の土器や古墳時代の土師器・須恵器などが河道を中心に出土している。奈良時代の遺物は比較的少なく、溝の堆積砂層から黒色土器、土師器・須恵器が出土する。平安～鎌倉時代のものは井戸から東播系須恵器こね鉢や瓦器椀、東西方向



調査地全景（右が北）

の小溝から土師器皿・瓦器碗などが出土している。包含層からは室町時代の備前焼播鉢なども出土した。

まとめ 今回の調査での最大の成果は奈良時代頃の溝（用水路）・水口・堰など灌漑施設とともになう水田遺構を検出したことである。また、溝（用水路）の東北側には明確な遺構はないが整地土と考えられる堆積が認められることや、溝を西側溝と考えるならばその方向が一致することなどからこの部分は太子道推定線上にのった道路状遺構であるといえる。平安～鎌倉時代の遺構面で検出した遺構群は平安時代後期のものと平安時代末期～鎌倉時代前期のものが重複しており、水田面に残るウシやヒトなどの足跡は後者のものであると考えられる。平安時代後期の溝や小溝は奈良時代頃の溝（用水路）と方向が同じであり、平安時代末期～鎌倉時代前期の小溝は方向が東西・南北（条里制の区画方向と同じ）である。これらの溝の方向性が変化する時期は、出土遺物から平安時代後期～鎌倉時代前期の間であると考えられる。したがって、本調査は奈良盆地中央部における条里方向の地割りが実際に施される時期の推定を含み、奈良時代から鎌倉時代の土地利用についての具体的な資料を得ることができた貴重な調査となった。



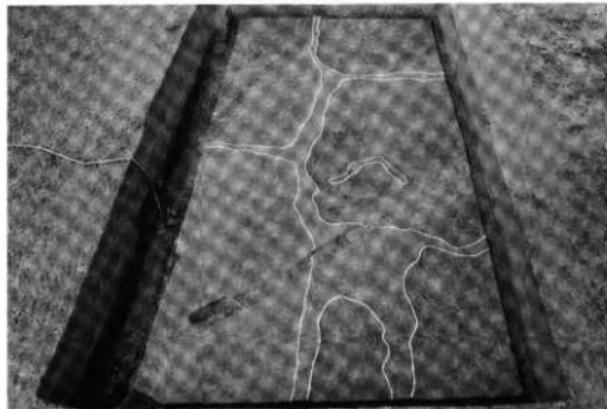
遺構近景（奈良時代頃）（南東から）

十六面・薬王寺遺跡第8次調査

位置と環境 標高46m前後の沖積地に立地する。調査地は遺跡の北縁部に位置し、奈良県立橿原考古学研究所が調査した第1次調査地の北側隣接地にある。

遺構・遺物の概要 3面の遺構面を検出した。上から遺構面Ⅰ～Ⅲとする。遺構面Ⅰの遺構は小溝が24条である。小溝はすべて南北方向に掘削されており、断面U字形で幅20～30cm、深さ5～10cm程度の規模を測る。遺物は細片が多いがすべての小溝から出土しており、瓦器、土師器、東播系須恵器などがある。これらの出土遺物から、鎌倉～室町時代前期の時期が考えられる。遺構面Ⅱは南北方向の小溝を12条、L字に屈曲する小溝を2条、T字状の小溝を1条、土坑を1基検出した。小溝はすべて断面U字型で幅20～30cm、深さ5～15cm程度の規模を測る。土坑は直径40cm、深さ20cmであり、瓦器碗の完形品を2個上向きの状態でおさめていた（裏表紙写真）。この瓦器碗の年代などから遺構面Ⅱは平安時代後期であると考えられる。遺構面Ⅲでは畦畔（幅30～40cm、高さ10～15cm）で区画された7単位の水田遺構を検出した。これらの畦畔は北西～南東の方向性をもつ。水田面上にはヒト・ウシなどの足跡や稻株痕が多数みられた。出土遺物は水田耕作土から弥生時代後期の壺・古墳時代後期の須恵器杯などが、水田面を覆う洪水堆積砂層からは土師器・須恵器が細片で出土している。堆積状況が第1次および第7次調査と類似していることや出土遺物から、洪水による水田埋没は奈良時代頃であると考えられる。

まとめ 今回の調査は奈良県下でも最古級の水田遺構を包蔵する十六面・薬王寺遺跡の古墳時代以降の農耕地を奈良時代頃（遺構面Ⅲ）、平安時代後期（遺構面Ⅱ）、鎌倉～室町時代前期（遺構面Ⅰ）と面的にそれぞれの実態を把握することができた。



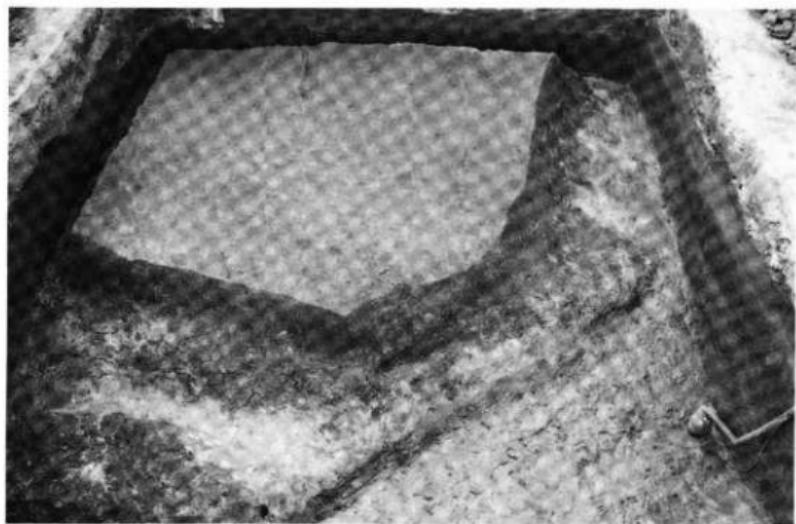
調査地全景（遺構面Ⅲ）（南東から）

(8). 羽子田遺跡第4次調査

位置と環境 遺跡は標高48m前後の沖積地に立地する。調査地は牛等の埴輪が出土した地点（羽子田1号墳）から南へ約50mの所である。また、1号墳から北へ150mの地点の第3次調査では、前方後円墳の後円部と周濠を検出している（2号墳）。この2号墳は4世紀後半、1号墳は6世紀前半の所産と考えられることから、この一帯に古墳群が形成されていたと考えられる。

遺構・遺物の概要 検出した遺構には、方形周溝墓と古墳時代の小溝・土坑がある。方形周溝墓の周濠は調査区の南半から東半にかけて検出したもので、推定幅5m前後、深さ0.9mを測る。墳丘部分は削平されており、墳墓の形態はわからないが、一辺15m前後の方墳と考えられる。主体部は削平されたと考えられる。時期は古墳時代前期である。小溝は方形周溝墓の周濠が埋没した段階につくられた古墳時代後期のもので、南東から北西方向に走向する。溝幅約1.5m、深さ0.4mを測る。土坑は調査区の北西部で2基検出した。いずれも長径1.2m前後、深さ0.4m程のもので、土器小片のみが出土した。

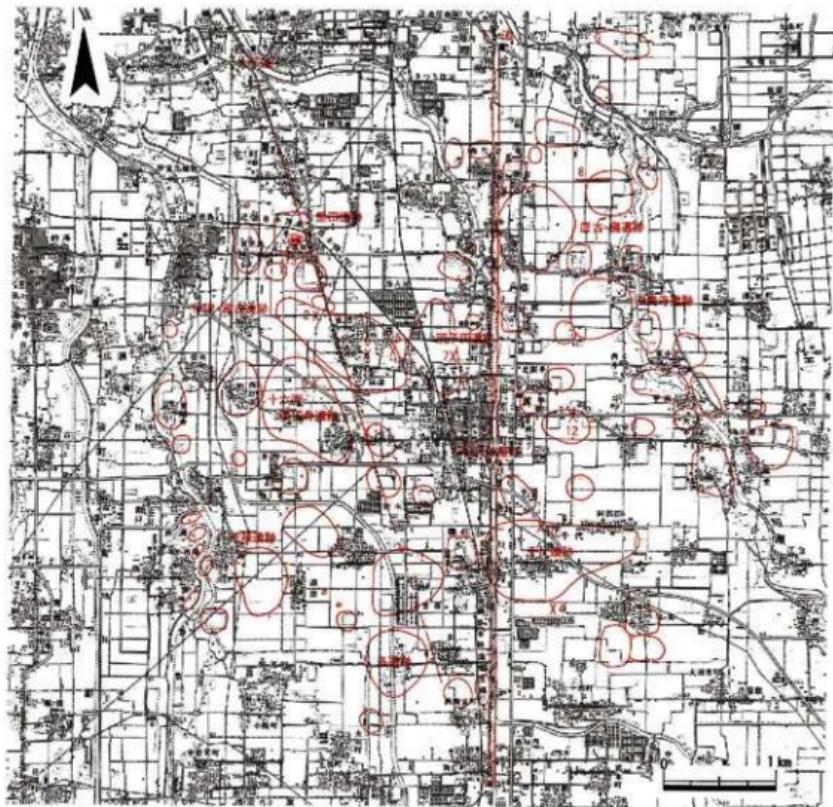
まとめ 今回の調査は小規模であったが、古墳時代前期の周濠を確認した。前期段階から方形周溝墓と2号墳のような大型墳が共存する古墳群であることが判明した。また、1号墳の遺物と思われる須恵器や埴輪も包含層から出土しており、隣接する形で古墳が並んでいたのであろう。弥生土器も出土しており、保津・宮古遺跡の東限として理解できる。



調査地全景（方形周溝墓・古墳時代前期）（南から）

3. 試掘調査・立会調査の概要

試掘調査と立会調査は平成3年度で13件を数える（第2表）。前年度と比較して件数は減少傾向にはあるが、そのなかで保津・宮古付近と十六面・薬王寺付近といった檍原バイパス計画線上周辺に集中した感がある。とくに十六面・薬王寺遺跡では薬王寺62番地他と十六面48-1番地他で古墳時代、及び中世の遺物包含層・遺構面を確認し、本調査にそれぞれ変更となった。その他、下ッ道と千代遺跡に成果がみられた。下ッ道では唐古501番地他で中世・近世の遺物包含層を、また千代遺跡では千代字下阪殿136番地他で古墳時代～中世の遺物包含層を確認することができた。



第2図 田原本町の遺跡と試掘・立会調査地点

第2表 平成3年度 試掘調査・立会調査一覧表

番号	遺跡名	調査地	原因者	工事の目的	進度番号 (田代文)	進度日	調査日	内 容
1	十六面・乘王 寺 太子造	田原本町薺王寺 62, 63-1, 64 -2, (64-1・ 65-1 の一部) 寺地	株式会社 富士工務店	宅地造成 住宅建設	298	3.2.28	3.4.22	2 m × 60 m の試掘坑を 設定。中世及び古墳時代 の遺構箇所を確認し、 本調査に変更。本調査 成果は本年報のP13に 掲載。
2	保津・宮古	田原本町宮古 352-3, 353- 2番地	田村利一	農家住宅建設	25	2.4.18	3.5.10	津化粧部分で立会。 既に盛土が1.5 mあり、 調剤は水田耕作土に及 んだのみで、遺物等は 未確認。
3	下ヶ道	田原本町唐古 501, 502番地	中西美雅	住宅建設	92	3.7.25	3.8.30	1 m × 2 m の試掘坑を 設定。地表下0.7 m以 下に中世及び近世の遺 物包含層を確認。
4	千代	田原本町千代字 下坂城136, 137 番地	山口寿一	青空駐車場	118	3.8.9	3.9.27	橢円部分の立会で深さ 0.6 mまで調剤。古墳 時代・中世の遺物包含 層を確認。
5	保津・宮古	田原本町新町 141-3, 142- 1, 143-2番 地	吉川伸仲	宅地造成	404	2.2.26	3.10.19	2 m × 2 m の試掘坑を 深さ2 mまで調剤。遺 物は未確認。
6	十六面・乘王 寺	田原本町十六面 (48-1・49- 1の一部) 番地	小浦石油 株式会社	ガソリンスタ ンド建設	79	3.6.26	3.10.21	1 m × 11 m の試掘坑を 設定。中世及び古墳時代 の遺構箇所を確認し、 本調査に変更。本調査 成果は本年報P15に 掲載。
7	八尾	田原本町八尾 61-1, 61-2 番地	田原本町長	下水路改修	140	3.9.5	3.10.21	掘削部分で立会。深さ 1.8 mの掘削で遺物等 は未確認。
8	法賀寺	田原本町法賀寺 1302-1番地他	田原本町長	道路拡幅	142	3.9.5	3.11.7 3.11.14 3.12.10	掘削は0.6 mで遺物等 は未確認。
9	保津・宮古	田原本町宮古91 番地他	田原本町長	道路新設	141	3.9.5	3.12.10	2 m × 2 m の試掘坑を 3ヶ所設定。遺物包含 層は未確認。
10	千代	田原本町千代 819-1, 820番 地	旭東工業 株式会社	工場建設	204	3.11.12	3.12.20	2 m × 2 m の試掘坑を 2ヶ所設定。深さ1.5 m の掘削。遺構・遺物は 未確認。
11	阪手北	田原本町阪手 348-1番地	山辺広域行政 事務組合	防火水槽建設	82	3.7.1	3.12.26	鋼矢板をもじいた土質 工法(Y S P)による 工事約立会の為詳細は 不明。遺構・遺物は本 確認。
12	遺物散布地 (馬鹿跡地図 11-C-60)	田原本町大安寺 字物ウケ107- 3番地	森久美子	住宅建設	228	3.12.25	4.3.9	掩埋部分で立会。深さ 0.6 mの掘削で遺構・ 遺物は未確認。
13	遺物散布地 (馬鹿跡地図 11-A-73)	田原本町黒田89 -1番地	吉川義一	住宅建設	270	4.2.15	4.3.9	基礎部分で立会。深さ 0.6 mの掘削で遺構・ 遺物は未確認。



唐古・鍵遺跡第47次調査 漆器画土器(建物) 春生時代中期

田原本町埋蔵文化財調査年報 3

平成 3 年度

平成 4 年 3 月 31 日

編集発行 田原本町教育委員会
印 刷 関西美術印刷株式会社



唐古·鍵遺跡第49次調査



唐古·鍵遺跡第48次調査



十六面・東王寺遺跡第8次調査